

殺す子供たち

—— Pat Barker の *Border Crossing* を読む ——

河内 恵子

分析者と被分析者あるいは擬似親子：

Pat Barker (1943-)は暴力を執拗に描く。作家活動の初期には荒廃した地域に住む貧しい女たちが男による暴行や虐待によって肉体的にも精神的にも激しく傷つけられたり、最悪の場合には命を奪われたりする状況を繰り返し描いた。1990年代には第一次世界大戦を背景にした三部作、*Regeneration* (1991)、*The Eye in the Door* (1993)、*The Ghost Road* (1995)を発表し、これらの作品では、それまで描いていた底辺を生きる女たちではなく、中・上流階級出身の知的な男たちを中心に物語世界が形成されていた。核となるのは実在した人類学者・精神分析医 W. H. R. Rivers と戦地で精神に傷を負ったさまざまな兵士たちとの“talking cure”（話すことによる治療）の場面である。やはり実在した Craiglockhart War Hospital を背景に多様な症状に苦しむ兵士たちが活写される。食事をほとんどとれないにもかかわらず嘔吐を繰り返す者、不眠や悪夢に悩まされる者、亡霊を見続ける者、言葉を発することができなくなったり、突然吃音になったりする者。“talking cure”に必ずしも協力的とはいえない患者もいるが、Rivers は彼らの過去を根気よく聞き出し、その記憶に寄り添い、それらを記録する。そしてこの過程で兵士たちのトラウマの原因を見つけようとする。それぞれの症例は第一次世界大戦という凄まじい集合的暴力が個々の兵士の肉体と精神を蝕み、時としては、破壊してしまうという現実を具にみせる。また、戦地での過酷な経験が唯一の原因で症状を発している者もいれば、戦争以前の体験が、場合によっては幼少期の、患者本人も忘れていたような体験が原因となっている場合もある。ほとんど忘却していた過去の体験が戦争によって掘り起こされ、いくつもの層を成す記憶に苦しむという症例もあるのだ。自らのトラウマの原因と向き合うことで多くの患者は、精神のバランスを取り戻し、肉体的苦悩から解放され、戦場へと戻っていく。Rivers の仕事は最終的には、兵士たちを戦場へ戻すことを目的としており、試行錯誤を繰り返しながらも、聞くことと話し合うことに重点を置く彼の治療方法は成果をみせている。しかし、患者・被分析者の過去と向き合い、彼らとともに生きることは時として、きわめて過酷な体験を医師・分析者に強いる。

小説作品の中では Siegfried Sassoon や Wilfred Owen といった実際に第一次世界大戦で戦い、Craiglockhart War Hospital で治療を受けた実在の人物と Barker によって創造された人物が混在する。これらの兵士/患者のうちで三部作に一貫して登場するのが Billy Prior であり、彼こそは Pat Barker が創りあげた、多層を成す記憶を持ち、多面的な生を生きる人物である。分析者 Rivers はトラウマを抱える兵士たちにとっては、癒す者であり、過去を未来へと、たとえそれが戦争という時空であっても、繋いでくれる父親的な存在である。Billy は Rivers に分析困難な存在として対峙する。二人の関係をみてみよう。

この病院で治療を受けるのは士官以上の地位にある兵士であり、ほとんどが中産階級以上の出身である。しかし、Billy は労働者階級出身で高い教育を受けてもいない。彼が士

官としての地位を軍隊で確保できたのは、子供時代から彼を性的に弄んできた聖職者の口利きのおかげであった。public school accent で話し、士官の軍服を身に付けてはいても、彼は戦争がその存在を一時的に許した“temporary gentleman”に過ぎなかった。戦地で戦い続けることが彼の希望だが、心因性の喘息と時折起こる記憶喪失のため前線に戻ることができない。Rivers は Billy の症状の原因のひとつが彼の戦友の肉体が砲弾によって粉々に破壊され、その眼球を彼が拾ったという凄惨な経験にあると判断するものの、これだけでは Prior をトラウマから解放することはできない。内地勤務となった Billy に与えられた任務はイギリス国内で戦争反対を目的に過激な行動に訴える人物たちを摘発することだった。ところが、その運動の首謀者や支持者は Billy と同郷の労働者階級の友人やその家族だった。この任務を経験した後、Billy はいつも誰かに見られているような恐怖感を抱くようになる。じっと監視されているという感覚から自由になれないのだ。“temporary gentleman”である士官としての義務と自らの原点である故郷の人たちへの思いに揺れ動く Billy は彼自身が“monster”あるいは“Hyde”と称する人物を創り出す。この人物は、Rivers との面接の際に“I was born two years ago. In a shell-hole in France. I have no father.”(*The Eye in the Door* 240)と、とてつもない話を繰り出す。Rivers はこの alter ego、あるいは、psychic double の言動に「子供ぼっさ」という逃げ道を発見し、Prior の心の闇に、その過去を共に遡ること、光をあてていく。

繰り返される対話面接の過程で Rivers は Prior に「自分には 5 歳以降、視覚的記憶がない」と告白する。分析者と被分析者の立場が一時的に入れ変わった瞬間だった。Prior は Rivers が経験したかもしれない過去を想像で語るが、その内容は Rivers に衝撃を与える。Rivers のトラウマの内容は読者には明らかにされないが、聞き、記録する分析者の役割は聞かれ、記録される被分析者のそれへと短時間だが変わる。分析者と被分析者の間にはこのような役割の互換性が存在しうることを作品は伝える。Billy Prior との対話をとおして過去は現在をさまざまなかたちで侵略することを Rivers は再確認することになる。

武器製造工場に勤める Sarah Lumb と肉体関係にありながらも同時に Prior は上流階級出身で妻子のある Captain Charles Manning と同性愛の関係を結ぶ。異性愛者でもあれば同性愛者でもある Billy Prior は自分が何者なのか明確に把握できない。生まれながらに所属している労働者階級と軍隊での士官という地位は階級的な齟齬をきたしている。“temporary gentleman”という立ち位置は多くの矛盾によって作られており、Billy Prior は矛盾を生きることを余儀なくされた存在だ。子供時代に経験した性的虐待を基底とする多くの過去の層が Billy を造形し、彼はいくつもの役割を生ることを強いられてきた。それゆえに、彼の存在の軸は大きく揺れ動き、最悪の場合は、軸が失われ、内部から存在自体が崩壊する可能性があった。Rivers は被分析者 Prior の過去を丹念に辿り、彼のトラウマの本質を明らかにしていくことで、その存在の軸を補強する。この過程で、視覚的な記憶の部分的喪失という、自らが胚胎している空白の過去と向き合うという試練に直面しながらも、Rivers は、分析者に必要とされる被分析者との距離を保ち、“talking cure”を成功させる。すなわち、本人が望んでいたとおりの Billy Prior を最前線へと戻すことに成功する。

Regeneration 三部作において、歪で複雑な過去に記憶が波状的に攻撃されることで存在の軸が揺り動かされた Billy Prior を創り出し、この被分析者と分析者 Rivers との関係を描いた Pat Barker は現在のイギリスを背景に存在の軸が揺れ動いている（あるいは軸が欠如

した) 人間を創造し、この人物と分析者の葛藤を描き出した。殺人を犯した少年 Danny Miller の登場である。

再会：

Tom Seymour と妻の Lauren は破綻寸前の夫婦関係をどのように修復できるのか、話し合うことに疲れて外へ出かける。彼らが住んでいる地域はかつては波止場を中心にドックや倉庫が立ち並び賑わっていたが、今は時代に取り残されたかのように朽ち果てている。汚れた川に沿った道を歩いている間中、Lauren はしゃべり続けている。臨床心理士である Tom は患者に対しては「話し続けてください」と語るのが常だが、今は妻に向かって、心の中で、「頼むから、お願いだから、黙ってくれ」と懇願している。この時だった。ふたりは、若い男が上着を脱いで葉のようなものを口に含むと突堤から川に飛び込むのを目撃する。Tom は自らの命を絶とうとしている（あるいは、絶とうとしているように見える）男を助けようと「ショッピングカートや結び目のあるコンドームやアルミ箔のトレイやプラスチックのビン」などが浮いている川に潜り、身体にまとわり付いてくるような泥の岸へと男を引き上げる。

Tom pushed his face through it, to reach the edge of the mud. Thick, black, oily, stinking mud, not the inert stuff you encounter in country lanes and scrape off your boots at the end of the day, but a sucking quagmire. God knows how many feet deep. (*Border Crossing* 6)

Black and glistening, he lay there, a creature formed, apparently, of mud. (*Border Crossing* 7)

川から引き上げた青年は「泥でつくられたように見える」。この表現は *The Eye in the Door* において Rivers が患者たちの戦争体験を聞いた後、夢に見る兵士たちの姿と重なる。第一次世界大戦の戦場は川の流域が多かったため、戦死した兵士たちの身体は泥の中に沈んでいった。あるいは、負傷兵も吸引力のある泥の中に倒れて、溺死してしまうことも少なくなかった。Rivers は泥の墓場から起き上がってくる兵士たちの姿を目にする。

He [Rivers] was entirely alone. Until, with a puckering of the surface, a belch of foul vapours, the mud began to move, to gather itself together, to rise and stand before him in the shape of a man. . . . and again the mud gathered itself into the shape of a man, faster and faster until it seemed the whole night was full of such creatures, creatures composed of Flanders mud and nothing else, moving their grotesque limbs in the direction of home. (*The Eye in the Door* 244)

泥の中からよみがえる死者たちの姿。異国の地で倒れた兵士たちが故郷(home)を目指してその手足をグロテスクに動かしている。Rivers は泥の中からよみがえる死者たちを見つめ、Tom は泥の中からひとりの若者の命を救い出す。Rivers と Tom が経験する「泥」が生と死

の場所を表現しているという点では共通しているが、後者と妻の Lauren の間では子供ができないことが夫婦間の亀裂の大きな要因になっていることを勘案すると、Tom は泥からひとつの生命体を生み出したと言えるかもしれない。救急隊員によって担架で運ばれていく時、青年の顔についていた泥が乾いてひび割れてくる。「儀式用の仮面か、あるいは、悪質な乾癬」が割れるかのように。

青年が着ていた上着と自分のものを取り違えた Tom は病院を訪れ、意識を取り戻した青年、Ian Wilkinson と言葉をかかわす。

‘You don’t recognize me, do you?’ he [Ian Wilkinson] said. ‘I suppose I ought to find that reassuring.’

‘You were covered in mud.’

‘No, I mean before.’ His voice was hoarse. ‘When I was ten. Do you remember, you---’

Oh my God, Tom thought. He sat down heavily on the chair beside the bed.

‘Danny Miller.’

‘That’s right.’ (*Border Crossing* 21)

Danny Miller は 13 年前、10 歳の時、老婆 Lizzie Parks を殺害した罪で逮捕された。その時、彼の精神分析を担当し、「少年に罪悪の観念がある」として裁判の妥当性を提言したのが Tom だった。昔と変わらないかつての子供を内に隠している Ian Wilkinson に Tom は興味を抱いた。12 年間は安全な施設で暮らしていたはずだが、そこで彼はどのように変化したのだろうか? 10 ヶ月前に仮釈放された Danny はなぜ自殺しようとしたのだろうか? いや、あれは自殺ではなく Tom と会うために仕組んだことではなかったのか? つまり、狂言自殺だったのではないのか? さまざまな思いが心をとらえるが、Tom は悩んでいる(悩んでいるように演じている)Danny と「話す」ことを提案する。“talking cure”の開始は、殺した子供と精神分析者の再会の時だった。

罪を犯す子供たち：

たとえば 10 歳の少女 Michelle は養母の実の娘の鼻を噛みちぎった。また Jason という名の少年は放火して 4 人の人間を死に追いやった。Tom は精神分析者として面接してきたこのような子供たちの記録を整理し、彼/彼女たちの心理に関する著書を執筆している。現時点で彼が導き出した結論は犯罪を犯す子供たちのほとんどが貧しい地域の出身で、劣悪な環境(家庭・学校)で育ち、社会の一般的常識と異なる位相の「忠誠心、裏切り、正義、権利、勇気、臆病、評判、恥辱」といった問題に取りつかれた「戦士たち(warriors)」であるということだった。この仕事に取り組んでいる最中に Tom は Danny と再会したのだ。はたして Danny もまた「戦士」というカテゴリーにおさまるのだろうか? Tom はまず 13 年前の面接の記録をたどる。

10 歳という年齢ゆえに拘置所での面接にソーシャルワーカーや看守が立ち会っても構わないのだが、Danny は Tom と二人だけで話し合うことを希望した。他の人に聞かれたくないので窓やドアを開けることを拒否した。3 時間にわたる面接をとおして Tom は Danny

が「現実と空想を区別でき、殺すことは間違っていることだと、そして、また死は不変の状態であることを理解している」と判断した。その結果、Danny は成人用の裁判で、殺人事件の被告として裁かれることになった。

面接の場面において強い印象を与えるのは、Danny が Tom の動作を意識的に真似るということだ。他者の動きを自分の中に取り入れるという行為は相手と同化しようとしているか、あるいは、無である内部に何かを取り込もうとしていると考えることができる。この行為と関連するのだが、Danny は軍人であった父親に対して強い憧憬心を抱いており、父のようになりたいという気持ちが非常に強かった。「背が高く、がっしりとした身体。拳を握ると蠢く刺青。銃を所有している。そして人を殺したことがある」この父が軍隊を辞め、農場を経営するようになって、Danny が父を英雄視する姿勢は変わらなかった。ベルトで折檻される時ですら、父のこの行為を男らしいと感じていたのだ。1年4ヶ月前に父は愛人と出奔してしまっただが、彼への強い執着心は失われることはなかった。母親を軽視し、彼女に反抗する気持ちは強くなっていったけれども、また、彼は火に執着していた。窃盗と共に放火も繰り返していた。Tom がマッチを渡すと Danny は火をつけ、その時瞳孔は大きく開かれ指を火傷するまで火を消さなかった。

Danny は Lizzie Parks を殺害したことを否定していた。仔猫が生まれたから見に来るよと Lizzie に誘われたので家に行ってみると、Lizzie はすでに死んでおり、犯人と思われる人物が階上で動いている気配がしたので急いで自宅に走って帰ったというのが彼の言い分だった。しかし、法医学的証拠は彼の犯行を十二分に示していた。

Tom が纏めている犯罪を犯す少年少女の記録と照らし合わせると、Danny の出身階級は彼らより上で、住環境も劣悪とは言えない。そして彼は罪を犯した13年前、一般常識とは異なる位相の「忠誠心、裏切り、正義、権利、勇気、臆病、評判、恥辱」といった問題には取り憑かれてはいなかった。彼は「戦士」ではなかったのか？彼の内部を形成するのは一体何なのか？いや、幼すぎて内部にまだ軸が形成されていないのか？それとも、軸を造る基盤となるべき存在を、例えば、父を、失ってしまっているのか？

Danny の悩みは拘置所で歳上の少年たちに虐められないかということと Lizzie の姿がどうしても見えてしまうということだった。そこには反省や後悔や謝罪の気持ちは一切なく、ただただ自分を守ろうとする思いだけが見え隠れしていた。

精神分析者の記憶：

Regeneration 三部作の Rivers がそうであったように精神分析者 Tom は Danny と再会し、この被分析者の過去を具に検証していく過程で自らの過去を見つめることを余儀なくされる。10歳の時のことだ。Tom と友人の Jeff Bridges は、普段は湿地であるが、大雨の後池になった場所へ蛙の卵を探しに出かける。二人だけで出かけたのだが、Jeff の両親の友人の子供を連れて行くことになる。4歳の Neil は礼儀正しい、真面目な子供で、黒縁の眼鏡をかけて何か不安な表情を浮かべていた。大人たちは「キュート」と形容していたが、Tom や Jeff には「異星人」のような存在だった。雨靴を脱いで池に入った二人の少年は持参した容器に卵を掬い入れるのだが、ふと振り返るとそこには、雨靴を履いたまま、足場の悪い池の淵で身体のバランスを必死に保とうとしている Neil がいた。すべては冗談のはずだった。

It started as a joke. A cruel joke, yes, but still a joke. Whose idea was it to put frog spawn into Neil's wellies? (*Border Crossing* 61)

長靴の中に蛙の卵を入れられた Neil は、大声で泣き叫び、飛び跳ねる。転んで、泥だらけになり、顔は涙と鼻水で汚れ、失禁している。「冗談ではじめたこと」だったが、Neil が泣き叫べば叫ぶほど、Tom と Jeff はパニック状態になる。このままの状態に連れて帰ることはできない。そうかといって汚れを落としてやることもできない。岸に上がって呼びかけても Neil は池の淵から動かない。そしてこの時、Jeff が石を投げた。小さな石を。そして Tom も。Neil は二人の少年が投げる石から逃れようと池の中心へと動く。

Why did they do it? Because they were frightened, because they shouldn't have been there at all, because they knew they were going to get into trouble, because they hated him, because he was a problem they couldn't solve, because neither could be the first to back down. (*Border Crossing* 62)

二人の少年たちに殺意があったわけではない。しかし、小石ではなく大きな土の塊を、たとえ Neil に直接ではなくとも、池に投げ入れた時、エスカレートしていく自分たちの行為をどのようにやめればよいのか、わからなかった。たまたま通りかかった男によって Neil は助けられたが、実は、この時 Tom と Jeff も救われたのだ。3人の子供の命が救われたのだ。Tom は自らの行為を道徳的な責任感の欠如に求めているが、大人の出現という偶然に助けられた自分たちと偶然という助けがないために殺人を犯してしまった Danny とのあいだの差異とは何なのだろうか? いや、Danny にはおそらく殺意があったのだ。殺意と犯行を隠そうと虚言を駆使する才能があったのだ。殺す者と殺さない者の境界はどこにあるのか? Tom は過去の自分に逆行しながら考え続ける。

記憶と忘却：

Tom は、Danny を有罪と判断した陪審員たちは、警察・検察側から提出された法医学的な証拠をその判断材料としたと信じているが、Danny は彼が面接中に語った言葉を Tom が法廷で披瀝した際に、それまで「明確な言葉で受け答えする礼儀正しい美少年」に対して好意的であった法廷の雰囲気が一変し、Danny を「おぞましい殺人者」と捉える冷たい静寂さが生じ、有罪判決への流れをつくりだしたと主張する。“They didn't believe I'd done it till then. . . they believed me.” (*Border Crossing* 95-96) その時、Tom が法廷で伝えた言葉とは面接の際に「死が不変の状態であることを理解しているのか」と質問された時の Danny の答えの言葉だった。“If you wring a chicken's neck, you don't expect to see it running round the yard next day.” (*Border Crossing* 95) 農場での生活体験をもとに語られたこの言葉は少年の残酷さを法廷にいた人々の脳裏に鮮やかに刻みつけてしまったというのだ。

だが、はたして本当にそうなのだろうか? Tom は Danny の弁護人であった Nigel Lewis に確認する。Lewis は Danny の主張を裏付ける。陪審員たちは少年を信じていたのだが、彼への見方を変えたのは Tom の証言だった、というのだ。“It was you. You changed the way

they saw him.” (*Boder Crossing* 111) Tom の証言で裁判の負けを確信した被告の弁護士の言葉は自らの記憶の曖昧さを、あるいは、都合よく歪められた記憶を、Tom に認識させる。

有罪判決を受けた Danny は 11 歳から 7 年間 Long Garth という問題児支援学校で教育を受けた。精神分析を行わず、伝統的なパブリック・スクールの教育方式を取り入れたこの学校の校長 Bernard Greene は「過去を忘れて新しい生を生きること」を少年たちに伝える。きわめて美しい容姿と抜群の知能を有していた Danny は周囲の人びとを虜にしていくのだが、その状況を客観的に見ていたのは、校長の妻でフランス語の教師である Elspeth だった。彼女が最初に気づいたのは、Danny が夫の「弾むような、忙しげな歩き方」を真似することだった。「ミニチュア校長」のような姿は、校長への崇拜を示していると受け取る人もいたが、彼女には不快感を与えた。また、生徒は教職員をファーストネームで呼んではいけない、という校則があったが Danny はいつも彼らをファーストネームで呼んでいた。校長は「生徒と教職員との間には距離がなければならない」と主張していたにもかかわらず、Danny に関してはこの規則は機能していなかった。「教員と生徒が一对一で面談する場合は、必ずドアを開けておく」という規則があったが、Danny の場合、いつもドアは閉じられていた。「他の人には聞かれない秘密をあなただけに打ち明けたい」というようなことを言い、相手を喜ばせる。言われた教師は自分だけはこの少年を救えるのだと、激しい喜びと自己満足に浸るのだ。

Danny が 15 歳の時、英語とクリエイティブ・ライティングを教える Angus MacDonald が赴任してくる。彼のスコットランド訛りを真似することから Danny と Angus の関係は始まるが、少年の中に創作の才能を見出した Angus は校長の趣旨とは反対に「自らの過去と真摯に向き合い、それを書く」ことを勧める。自らの罪を書くことに恐怖を覚えたのか、あるいは他の少年たちに「先生のお相手」とからかわれることに怒りを覚えたのか、Danny は「ドアを閉めた二人だけの部屋」で Angus MacDonald に性的暴行を受けたと訴え、それまでは見せたことのない行為に走る。教室で暴れ、窓ガラスを割り、からかった少年の一人を刺そうとさえしたのだ。Danny の無実を信じていた人々にとってこの一連の行為は衝撃であった。Angus は学校を去り、後にクリエイティブ・ライティング専門学校を開くことになる。Danny は快適であったはずの学校を去り刑務所に収監された。しかし、学校での Danny の行為は裁判所や当局に報告されることはなかった。学校の名誉と Danny の将来を勘案した Greene の意図がこの決定には反映されていた。ここで確認しておかなければならないのは、学校の規則を破ったのは Danny ではなく、教師たちであったということだ。「教師たち」と複数形で表現するのは、Danny のために規則を破るという一線を超えたがために学校を去った教師は Angus を含めて 5 人いたからだ。

合成の人：

Elspeth Greene の観察と分析の言葉に戻ろう。美しく、頭の良い少年は優れた記憶力と模倣する技を持っていた。そして「自分はこの少年を助けているのだ」と周囲の人に思わせ、彼らに「定められた境界線を越えさせた」。

Danny was a bottomless pit. He wanted other people to fill him, only in the process the other people ended up drained. Some people were . . . I don't

know, mesmerized by the process, and so they kept going back for more.
(*Border Crossing* 164)

[Danny] Borrowed other people's lives. He . . . it was almost as if he had no shape of his own so he wrapped himself round other people. And what you got was a sort of composite person. (*Border Crossing* 171)

「底なしの無」を抱える Danny は他者の存在によって自らを充足させねばならなかった。あるいは無である自分を他者に巻き付けるようにして自分自身を造らなければならなかった。この他者によって自らを造ろうとする姿勢は幼い時から見られた。Tom との面談の箇所を思い出してみよう。弁護士やソーシャルワーカーを同席させることなく、しかも、ドアや窓を閉めた空間で Danny は精神分析者の Tom と向かい合った。この時、Tom の動きを観察して、模倣していた。殺人を犯した(かもしれない)少年は10歳の時にすでに他者を模倣することで自分を造り出そうとしていたのだ。面接の終了時、少年は Tom に抱きついた。そして Tom はこの行為を肯定的に暖かく捉えていたのだが、Danny は自分の身体を相手に巻き付けるようにして自分を造ろうとしていたのかもしれない。Tom の曖昧な記憶は、少なくとも部分的に、自らに都合よく歪曲されていたのだ。また、精神分析者という仮面で武装していなければ、Tom は多くの教師同様に境界線を越えてしまっていただろう。

クリエイティヴ・ライティング専門学校の The Scarsdale Writers' Centre に Angus を訪ねた Tom は学校で Greene によって提供された Danny に関する情報を確認することになる。

「彼に恋したのだ」と語り始めた Angus は恋した相手が「信じられないほど魅力的で、浅薄で、人を操ることに長けて」おり「彼自らが書き続けることを望んだ」と、そして「書くことをやめられなかった」Danny は殺人について書かねばならなくなることを怖れていたと続けた。それまで一度も殺人を犯したことを認めてはいなかったのだから。この恐怖感から逃れるために Angus に性的に虐待されたと告発したのだ。実際には性的な関係は一切なかったと彼は語り、Tom に「気をつける」と注意する。この注意を喚起する言葉は、Elspeth Greene からも Danny の弁護士であった Nigel Lewis からも発せられていた。Danny に友好的であった裁判所の雰囲気を変えてしまった Tom に彼が復讐を企てていると予測できるからであるが、それ以上に、二人だけで面談を行う過程において Tom が何らかのかたちで境界線を越えてしまうことを Danny を知る人たちは危惧したのだ。

揺れる軸、あるいは空洞化した内部：

離婚することになった Lauren が絵画や家具を運び出している時に Danny は予告なしに Tom を訪れる。妻と妻に付随する物たちが Tom の人生から退場することは彼の生活の場と彼自身の内部に大きな空白部分を出現させる。Tom は Danny が内部(inside)へと境界線を越えたことを認識する。

Danny was in the middle of all this, and I suddenly thought, I shouldn't be doing this. I mean---what I'm trying to say is, You don't want an empty space at the centre of your life when you've got somebody like Danny

prowling round the edges. He's always pressing for more. . . . And the emptiness gives him a way in. (*Border Crossing* 223-24)

自らの内部の軸が揺れ動いているのを Tom は今、明確に認識する。罪を犯す子供たちの精神分析を行うことによってその内面を見つめてきたはずなのだが、Danny のように存在の軸となる内部を持たない（あるいは失った）人間に精神分析は無力だったのだ。¹ 分析者と被分析者の境界線を軽々と超えたのは被分析者の方だった。内部に入りこまれる危険を感じた Tom は、内部の軸の揺らぎを許し、過去の記憶を自分の都合に合わせて歪めている、自分自身の存在の危うさに愕然とする。そして、空洞化した内部しか持たない Danny は Tom を自らの内に取り込むのではなく、Tom の中に入り込むことによって自らの過去を造り直そうとしていたのだ。“Tom”とファーストネームで呼びかける Danny と Tom は共通の過去の物語を創作しようとしていたのだ。いや、少なくとも過去を作り直すという共犯関係を形成していたのだ。²

ぐらつく軸に Billy Prior は苦しんでいた。しかし、彼には、すぐれた分析者が帯同していた。自らの過去の暗い部分と向き合うという自己犠牲を経験しながらも Prior と共にその過去を再生した Rivers だ。このきわめて深い理解力と冷静な距離感を持つ分析者の力で内部の軸を強化した Prior は戦場へと戻っていく。Tom は第二の Rivers となることはできない。また、おそらくは、Danny が求めている擬似的父親にもなれない。少なくとも現時点では不可能だ。存在の軸を失いかけている Tom はこの空洞化寸前の内部が周縁から侵害されることを怖れている。怖れる分析者に、存在の軸そのものを持たない被分析者を救うことはできない。

殺す子供たち、再び：³

11 歳と 12 歳のふたりの少年が老婦人を殺害したかどで起訴されたというニュースがイギリス国内を駆け巡る。そしてジャーナリズムは 13 年前に老婆を殺害した当時 10 歳の Danny Miller へ露骨なまでの関心を示す。誰かにつけられていると確信した Danny は突然 Tom を訪れる。分析者への被分析者の復讐という物語、あるいは、空洞を胚胎する者同士による過去の共作という物語はジャーナリズムから逃れようとする者とその逃亡を助ける者との共犯関係物語へと方向転換する。Danny は語り始める。その声には「子供の甲高い声」が重なり、ますます大きくなるその子供の声は Lizzie Parks を殺害したことをはじめて認め、その状況を詳細に話す。そして、最後に言う。“I don't know why I killed her. I didn't know then, and I don't know now. And I don't know how to live with it.” (*Border Crossing* 243)しかし、彼の告白には、その存在と同様に空洞がある。Lizzie を殺害した翌日に

¹ Mary Trabucco は、Danny の存在を「空間的な寄生」を体現すると論じている。

² Mark Rawlinson は Tom の役割を精神分析者というよりも歴史家のように指摘している。

³ Sharon Monteith が指摘しているように子供による殺人事件というテーマは 1993 年 2 月に Liverpool で起こった James Patrick Bulger 殺害事件を背景にしている。当時 2 歳の James は Jon Venables と Robert Thompson という 10 歳の少年たちに惨殺されたのだが、二人の少年に連れられて歩く James の姿が防犯カメラに収められていたし、3 人の姿を 30 人余りの人が目撃していた。二人の少年は逮捕され、実名が公表され、一般市民やジャーナリズムの大きな非難に晒された。二人は服役後、名前を変えて暮らしている。

Danny は再び彼女の家を訪れているのだが、その際に生じた空白の 5 時間がどうしても埋められないのだ。これは 13 年前の捜査段階の時から解明されないままになっている部分だ。いや、警察と検死官は Lizzie が殺害された後“molest”、“play with”されたと判断し、被害者の傷付けられた死体を見た Tom も「子供にこのようなことができるはずはない」と証言しているのだが、死体に如何なる損傷が加えられたのか、作品内で具体的に語られることはない。Danny 自身、5 時間の間に“I made her do things”と告白するにとどまる (*Border Crossing* 254)。

殺人を犯した少年たちを乗せた護送車を取り囲んだり、罵声を浴びせたりしている人たちの映像をテレビで見た Danny は自分自身が逮捕され時の記憶に苦しむ。Ian Wilkinson としての人生の終焉が近づいているのだ。一時的な名前を持つ“temporary being”であり続けることが殺す子供に与えられた生きる方法なのだ。Tom の家に避難している彼は、Lauren が出て行ったことで、中心部を失った部屋の暖炉に大量の薪をくべて危うく火事を起こしてしまうという事態を引き起こす。殺人の記憶と火への執着は 13 年という歳月を一瞬にして消し去ってしまうのだ。そして、Tom の家まで押しかけてくるジャーナリズムもまた周縁から内部へと侵入してくる脅威となっている。その身を警察官に守られながら、Danny は Tom の家を脱出する。

双眼鏡と革ベルトと書くことと：

Tom は地方の大学に講演に赴き、そこで偶然 Danny と再会する。彼は大学院でクリエイティブ・ライティングを専攻することが決まっているのだが、その手助けをしたのは Angus MacDonald だった。Danny の空洞化した内部を埋める役割を Angus は再び担っているのだ。この情報を聞いて Tom は Angus に嫉妬心を抱く。Danny の為に境界線を越えることがもはや自分にはできないという強烈な哀しさは、確たる軸を持たない者の不安と諦めにも似た自己肯定を示している。Rivers が被分析者たちとの距離を保ち続けたのに対し、被分析者の魅力に依然として支配されている分析者 Tom の心がここで前景化される。

現在の状況を尋ねた Tom に対して Danny は「彼女とはもう戦っていない。僕の頭脳の細胞のいくつかは彼女が占めていいんだ」と Lizzie Parks を記憶に留めながら生きていくことを決意したと語る。彼は「書くこと」によって殺した自分の存在を認め、記憶の中の Lizzie と共存していくことで過去と折り合いをつけようとしているのだろうか？書くことは、たとえその対象が過去のことであっても、Danny を未来へと導く唯一の手段なのだろうか？新しい名前を与えられた殺した子供の物語はここから新たに始まる。

自らの内面を造ってくれるはずであった憧れの父は出奔した。その父が家に残したのは双眼鏡と鞭としても使っていた革ベルトだった。遠くのもののは見えても近くに存在するものや自分の内側を見るには役立たない双眼鏡。大人の男の魅力とともに理不尽な暴力と恐怖の象徴であった革ベルト。双眼鏡で Danny は小さな母の姿を見た。革ベルトの端をつかんだ Danny はもう一方の端をつかんだ母を力づくで引き倒した。Lizzie を殺害する直前のことだ。

新しい名前を持つ、「書く男」はもはや双眼鏡と革ベルトは必要としないのだろうか？
父親の象徴であった双眼鏡と革ベルトが造れなかった存在の軸を、「書くこと」は造って
くれるのだろうか？その内部に深い空洞を残したまま物語は終わる。⁴

⁴ Billy Prior も戻った激戦地で、生まれて初めて文章を書く。共に戦う兵士たちの姿を記録するのだ。
書くという行為は Prior に過去を見つめ、記憶を辿るための静寂な時を与える。

引用・参考文献

Barker, Pat. *Border Crossing*. Penguin, 2001.

---. *The Eye in the Door*. Penguin, 1993.

---. *The Ghost Road*. Penguin, 1995.

---. *Regeneration*. Penguin, 1991.

Brannigan, John. *Pat Barker*. Manchester UP, 2005.

Monteith, Sharon. *Pat Barker*. Northcote, 2002.

Moseley, Merritt. *The Fiction of Pat Barker*. Macmillan, 2014.

Rawlinson, Mark. *Pat Barker*. Macmillan, 2010.

Trabucco, Mary. "Fire and Water in *Border Crossing*: Testimony as Contagion and Cure." *Re-reading Pat Barker*, edited by Pat Wheeler, Cambridge Scholars, 2011.

河内恵子編著、『現代イギリス小説の「今」』、彩流社、2018。